氏　　名	和田　恵
学 位 の 種 類	博士（臨床心理学）
報 告 番 号	甲第６２１号
学位授与年月日	２０２４年3月３１日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	高機能自閉症児の社会認知における臨床発達心理学的研究 ―命題的心理化と言語能力の関連の分析―
審 査 委 員	（主査）大石　幸二（立教大学大学院現代心理学研究科教授） 松永　美希（立教大学大学院現代心理学研究科教授） 藤野　博　（東京学芸大学大学院教育学研究科教授） 松岡　勝彦（山口大学教育学部教授）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１）論文の構成

本論文は，本文 129 頁（Ａ４判・ワープロ打ち；約 75,500 字）と資料３点（別冊）からなる。構成は，下記記載のとおりである。

第Ⅰ部：序論

第１章　先行研究

第１節　自閉スペクトラム症における心情推察

第１項　自閉スペクトラム症にみられる特徴

第２項　ASD 者における社会性障害と心の理論

第３項　ASD 者を対象とした心情推察を扱う課題

第４項　ASD 者と心理化

第２節　ASD 者を対象として心情推察を指導した実験的研究

第１項　ASD 児に心情推察を教えようとする実験室的研究

第２項　ASD 者を対象として心情推察を指導する臨床的支援法

第３節　心情推察に関連する概念

第１項　弱い中枢性統合

第２項　言語的側面と心情推察との関連を扱った先行研究

１）言語能力を取り上げた研究

２）ナラティブを取り上げた研究

３）言語的理由付けを取り上げた研究

４）その他の研究

第２章　問題提起

第１節　心情推察を評価する既存課題の問題点

第２節　新規の心情推察課題の作成にあたり着目すべき点

第３節　本論文の目的

第Ⅱ部：本論

第３章　研究１ HFASD 児における文脈分析課題を用いた心情推察の予備的検討

第１節　問題と目的

第２節　方法

第１項　参加者

第２項　期間と場面

第３項　装置と課題
第４項　試行手続きと結果整理
１）心の理論課題
２）文脈分析課題
第５項　倫理的配慮
第３節　結果
第１項　文脈分析課題における正答率の推移
第２項　心の理論課題
第４節　考察

第４章　研究２　社会的文脈を表す絵カードの開発
第１節　問題と目的
第２節　方法
第１項　日常における典型的な社会的エピソードの調査
１）対象者
２）手続き
第２項　課題に用いる社会的エピソードの選定・絵カードの作成
１）手続き
第３項　課題における絵カードの妥当性の確認
１）対象者
２）実施場面
３）手続き
第４項　倫理的配慮
第３節　結果
第１項　日常における典型的な社会的エピソードの調査
第２項　課題に用いる社会的エピソードの選定・絵カードの作成
第３項　課題における絵カードの妥当性の確認
第４節　考察

第５章　研究３　文脈分析課題を用いた TD 児による心情推察の検討
第１節　問題と目的
第２節　方法
第１項　参加者
第２項　期間と場面
第３項　文脈分析課題
第４項　試行手続き
第５項　分析方法

１）全体の正答率の評価
２）ナラティブの評価
第６項　倫理的配慮
第３節　結果
第１項　全体の正答率の評価
第２項　ナラティブの評価
第４節　考察

第６章　研究４　HFASD 児における文脈分析課題を用いた群間比較
第１節　問題と目的
第２節　方法
第１項　参加者・関与者
第２項　期間と場面
第３項　言語能力と自閉スペクトラム指数（AQ）の測定
第４項　施行手続きと分析方法
１）誤信念課題
２）文脈分析課題
第５項　倫理的配慮
第３節　結果
第１項　参加者の言語能力，AQ，誤信念課題
第２項　誤信念課題による介入の効果評価
第３項　言語能力と誤信念課題との関連
第４項　文脈分析課題
第５項　文脈分析課題，言語能力，誤信念課題における関連
第４節　考察

第７章　研究５　HFASD 児一事例における言語的理由付けの検討
第１節　問題と目的
第２節　方法
第１項　参加者
第２項　期間と場面
第３項　試行手続きと分析方法
第４項　倫理的配慮
第３節　結果
第４節　考察

第Ⅲ部：結論

第８章　総合考察
　第１節　研究の概括
　第２節　結論
　第３節　本研究の成果と課題

引用文献
謝辞

資料（別冊）

（２）論文の内容要旨

自閉スペクトラム症にみられる症候のひとつとして社会的コミュニケーションの困難が挙げられるが，これは知的に問題のない高機能自閉スペクトラム症（High-functioning autism spectrum disorder：HFASD）においても同様である。Baron-Cohen, Leslie, & Frith（1985）が，ASD 者における社会性の困難を「心の理論障害仮説」によって説明して以降，誤信念課題を用いて他者信念の理解を測定する研究が行われてきた。このような先行研究から，ASD 者における誤信念理解は言語能力と関連することが明らかにされてきた（Happé, 1995）。また，特に他者信念の理由付けを行う際には，定型発達（Typical Development：TD）児と比較して，HFASD 児は直観的な心情理解の困難を言語的に補って解決していることが示唆され，この方略は命題的心理化と称された（別府・野村，2005）。そして，命題的心理化は，HFASD 児に対して学習させられる可能性が指摘されている（別府，2007）。HFASD 児に命題的心理化を学習させるためには，社会的文脈の読み取りにあたって，「情報の小片に注意するが全体的な一貫したパターンに注意ができない」（大井，2006）という弱い中枢性統合の傾向を考慮する必要があると考えられる。しかし，そのような点に着目して，情報の読み取りおよび言語的整理を補おうとするような課題はこれまでに作成されていない。また，ASD 者の言語面と心情推察を関連させて扱った先行研究では，言語能力の指標として主に語彙理解力（Happé, 1995），統語能力（Fisher, Happé & Dunn, 2005），語用論（大井，2006）の重要性が語られてきた。しかし，これらの包括的な検討はまだ行われておらず，命題的心理化を活用・評価するに際して，どのような言語的側面に着目すればいいのかも明確になっていない。和田・大石（2022）は，HFASD 児の心情推察を評価するのに適した言語的指標のひとつとして，弱い中枢性統合との関連を考察し，ナラティブを取り上げている。しかし，具体的な介入を通して検討された研究はまだ僅少であり，これから検討を重ねていく必要がある。

本論文における一連の研究の目的は，HFASD 児に命題的心理化の学習を促進させるために新たな課題の枠組みを作成し，課題に用いるツールの妥当性・および言語的側面から心情推察を評価する方法を検討することであった。

研究１では「文脈分析課題」を作成し，HFASD 児１名を対象として，基準変更デザインに基づく介入を実施した。文脈分析課題は，社会的文脈を表した絵カードを提示し，参加者の手元に用意したワークシートに，登場人物の表情などの文脈情報と，心情推察を書き出すものであった。その結果，文脈情報は全体を通して高い正答率を示し，心情推察も正答率に大幅な変動はあったものの，可能となることが示された。ここから，情報を読み取る段階で弱い中枢性統合の傾向を補えばそれは可能になるものの，それらの情報を統合して，心情推察

を行う段階に困難を示すことが考察された。しかし，介入効果を測る誤信念課題では，信念の理由を説明できるまでには至らず，介入の間に１か月の夏季休業を挟むと効果が維持されなかったという課題を残した。

研究２では，文脈分析課題に用いるツールの妥当性を担保する必要があるという課題を解決するため，研究実施者自らが新たな絵カードの作成を行った。小学校教諭と保護者を対象に小学生の日常で起こりうるエピソードの収集を行い，それを元に作成した絵カードを用いて，TD 児２名に文脈分析課題の予備的な実施を行った。その結果，両児共に大きな読み取りの失敗はみられず，ストーリーの読み取りや心情推察を行うにあたって，絵カードに明確で十分な量の情報が含まれていることが示された。また，７歳児よりも９歳児において具体的な言及とともに登場人物の心情説明が行われており，絵カードが対象とする年齢を９歳とすることにおいても，事例研究に基づく妥当性が確認された。

研究３では，研究２で作成した絵カードを用いて，TD 児 51 名を対象に文脈分析課題を実施した。その結果，心情推察の正答率は絵カードによって大きな変動幅がみられた。すなわち，TD 児の中には心情推察に失敗する例が散見された。また，課題の終了後にストーリーの要約を行わせ，ナラティブの分析を行ったところ，心情と関連させて因果関係に言及する回答が最も多く，次いで事実と関連させて因果関係を説明する回答が多いという結果であった。特に心情推察における正答率が低かった絵カードでは，一般的な規範に照らして判断をした結果，誤って文脈を理解したり，登場人物の心情を過剰に推察しようとしたりする傾向がみられた。ここから，一定の年齢を基準にして通過・非通過を比較する検討だけでなく，心情推察の質的側面に着目して HFASD 児との比較を行う必要が示された。

研究４では，16 名の HFASD 児を対象として文脈分析課題を用いた介入を実施し，心情推察の正答率やナラティブの評価によって測定される指標と言語能力との関連を検討すると共に，介入の効果評価を行った。その結果，介入による心情推察の成績向上はみられなかったものの，HFASD 児はストーリーを説明する際に事実を因果関係の中に位置づける程度の語りを行うことと，弱い中枢性統合の傾向や統語能力が心情推察の指標と関連にすることが明らかとなった。ここから，HFASD 児は，細部へ注意する傾向があるために断片的な情報の読み取りを行うが，高い統語能力を有する場合にそれを駆使して整合性のある形で社会的文脈の理解や心情推察を行っているという可能性が示唆され，和田・大石（2022）の仮説が一部検証された。また，日常生活場面で社会的な出来事・物語を理解するために用いている能力と心の理論課題で測定している能力が必ずとも等質ではない可能性も考慮すべきであることが示唆された。

研究５では，研究４において規定の手続きによる課題の遂行が困難であった

児童１名を対象として，プログラムの調整を行い，文脈分析課題を実施した。課題の実施にあたっては，児童の認知的な特性から，多くの情報を落ち着いてひとつずつ処理することが難しい様子であった。そこで，ワークシートによって示される情報をシンプルな形に調整し，書字作業を取りやめて口頭による心情推察の報告を求めた。その結果，参加児は落ち着いて課題へ取り組むことができるようになった。心情推察に関する言語的記述の質に着目すると，独特の認知や説明を行う傾向があり，特に複雑なストーリーにおいて，情報を因果関係の中に位置づけながら整合性のある説明を行うことは困難であるようだった。これらの試みにより，絵カードからひとつずつ情報を言語化するよりも，それらを統語的にまとめる段階の支援に重点を置き，より簡略的な方法を用いて課題を再構成することでより効果を上げられる可能性が示唆された。

以上の５つの研究から，文脈分析課題を用いる利点の整理と，理論的考察を行った。従来の研究では，言語的側面から心情推察の評価を行う際には，誤信念課題の理由付けやナラティブが指標として用いられてきた。しかし，誤信念課題は同一のストーリー構造の理解を把握するに留まり，ナラティブは多量の語りを得る必要があるという点で課題が残されていた。研究１～５において用いた文脈分析課題は，比較的短時間での実施が可能で，かつ心情推察の評価に十分に活用できることが明らかとなった。HFASD 児を対象に社会認知的な枠組みの指導をするという点で，広く研究・臨床的に運用できる可能性が示唆された。

文脈分析課題は，ASD 者にとって社会的文脈をとらえやすく，学びやすい形式を取ることを重点に置いて作成されている。このような視点を積極的に取り入れながら学習プログラムの枠組みを作成することにおいて，文脈分析課題がひとつの例となることには，臨床的・研究的な意義があると考えられる。さらに，文脈分析課題から得られたナラティブは，研究３，４において因果関係への言及に着目した評価を行った。この指標を応用することで，より多様な社会的ストーリーを対象にしながら，HFASD 児の命題的心理化を検討することが可能になると考えられた。

また，研究４において，文脈分析課題から得られた心情推察とナラティブの指標には，統語能力や弱い中枢性統合との関連がみられた。ここから，弱い中枢性統合があるために情報の断片に注意する傾向があるものの，高い統語能力を有している場合には，それを駆使して情報を意味付け，社会的文脈の理解につなげることができるという機序が予想された。そのため，今回の課題では実施していなかった統語面での介入を追加的に行うことで，心情推察の促進に対する効果を高められると考えられる。

一方で，研究上におけるいくつかの改善点も整理された。研究５の事例から，多様な特性のスペクトラムを示す HFASD 児に文脈分析課題を実施しようとする

際に，一部の児童においては作業の負担が大きい可能性が考えられた。ワークシートはより簡略的な形で提示が可能であるかもしれないため，改良を重ねる必要がある。また，本研究においては参加者１人につき７回以上の継続的なかかわりを前提にして計画を行ったが，そのために多数の参加者を募ることが困難であった。標本数の少なさが本研究における統計的分析の結果に影響してしまったため，今後に計画を行う際は支援的なかかわりと単純な言語能力との比較について，参加者数を吟味する必要がある。さらに，今後の研究においては，異なる発達障害が併存している状態像などを含め，研究場面だけではなく，日常における心情推察との関連も検討しながら，事例を蓄積する必要がある。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本論文は，いわゆる自閉症の障害本態のうち，社会的コミュニケーションの障害に焦点をあてた研究である。自閉症の社会的コミュニケーション障害の軽減をめざす臨床発達心理学アプローチの中には，自閉症を持つ人の社会認知の特異性に着目する研究があり，そのひとつが命題的心理化である。言語記述を行うことで社会的なできごとを客観的に理解することができ，適応的な行動につなげうる可能性については先行研究で示唆されていた。しかしながら，そのための課題を開発し，アナログ研究ではなく，実際の臨床事例への適用を試みた研究報告はなかった。それは，そのような臨床事例への適用を行う際，自閉症の障害本態に関わる中枢性統合の弱さが働いて，社会的なできごとの統合的な理解の難しさに直面するからであった。また本論文は，研究の構想段階より，この問題を解決するために「文脈分析課題」と称する枠組みを考案して，実証研究データの収集を試みた画期的な研究である。

研究１～５を通じて，①文脈分析課題が，高機能自閉症児に，注意を向けるべき対象を明確にする効果があり，②この課題によって恩恵を受ける児童は，統語的な能力の高い者で，③定型的な心の理論課題の成績とは独立に，社会的な物語の解釈を助けることができることが明らかになった。一方で，④個別的な情報を抽出することが中枢性統合の弱さを露呈して，課題従事が困難である事例への対応や，⑤定型的な心の理論課題の成績が一体どんな日常的社会能力と関連しているのかを解明する必要性がある，という新たな問いが生まれた。今後はそのような日常的な相互作用場面の社会認知に関する検討を実験・実践の両面で進める必要がある。

（２）論文の評価

まず，内容面の評価については，本論文には，高機能自閉症児の社会認知を弱い中枢性統合という面から理解した上で，この脆弱性を補償するために言語機能が重要な役割を果たすことを実証しようとする挑戦的内容が示されている。また，心理化を可能とする思考の枠組み（行動分析学における学習セット）の変化を言語的理由づけから捉えようとする点は，別府・野村（2005）が研究で示唆していることを一歩進めており，その点に本研究のストロングポイントがある。認知と行動の接続点にあたる領域の研究で，新たな研究方法論の開拓にもつながるという面があるように感じられる。本研究が今後さらに発展して，研究知見が積み重ねられていくことで特別支援教育や発達障害臨床において，

将来の実践上の展開が期待される良質な研究であると評価できる。公開審査会においては，対人関係改善のツールとして定型発達児を含む児童生徒の社会的能力の促進に貢献し得る可能性についても肯定的な評価がなされた。

次に，構成面の評価については，本研究の構成は，事例研究に基づく問題の析出，そして析出された問題を解決するための課題の検討，さらに検討された課題を段階的に解決するための実証研究と効果評価，そして最後に，社会実装に向けて生じる実際的問題（自閉症の障害本態のもうひとつである限局反復性行動）への対処と今後の研究展望のような流れとなっており，臨床研究としての必要な構成となっている点は，読者を無理なく結論へと導くという点で評価できる。また，本論文を構成する研究１～５のすべての研究が日本学術会議協力学術団体の発行する学会誌および競争的資金を得た研究助成団体の学術紀要に掲載・採択決定済みの論文から構成されている点も高く評価できる。

一方，本論文には，論文の完成度を高める上でいくつかの検討点および課題が残されている。研究１および研究２は，新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックの中で行われた事例研究および予備調査研究である。事例研究については，参加者間多層ベースライン・デザインを用いた応用行動分析の手法を用いることができていたら，学習過程の個人差についての知見を得ることができ，文脈分析課題を開発する際の資料収集がより迅速に進んでいたであろう。そうすれば，心の理論課題や言語学的能力を評価するための指標を，多面的に検討することができ研究２に生かすことができたと思われる。この点については，今後の系統的リプリケーション研究の実施を期待したい。

また，研究３および研究４は，コロナ禍の影響が続く中，医療機関におけるデータ収集が困難となり，教育機関および福祉機関に１件ずつ出向いて対象者の同意を得ながら丹念に進めた研究である。定型発達群との比較や，介入群と統制群を設けウェイティングリスト法を用いた群間比較研究を試みた点には，この障害（自閉症の臨床群）の出現率の低さを考えた場合に，並々ならぬ労苦があったことが想像される。しかし今後，本研究を標準化した上で命題的心理化を促す標準的な学習プログラムとする場合に，あらかじめ効果量を検討した上でサンプルサイズを定めた研究の実施が必須となる。本論文に示された標本数（研究の参加者数）は，英国や米国で組織的に行われた研究と比べるとその数が不十分であることは否めない。この点については，今後引き続き，事例を重ねていき，再分析した結果をぜひ論文として公表してほしい。なお，言語学的能力が命題的心理化に及ぼす効果を検討する指標については，より一層の精緻化をはかることが望まれる。そのように十分な標本数（研究の参加者数）を集め，効果評価の精緻度を高めることができた場合には，心の理論課題の成績と本研究における文脈分析課題の成績との関連を明確に指摘することができ，

本研究の強みを補強することになるはずである。

さらに，研究５で行われた事例研究は，他の発達障害や知的障害，あるいは思春期以降に併存が明確になる精神症状を併せ持つ事例に対する文脈分析課題の適用について大いに示唆的である。ただし今後の課題として，本研究で考案している課題が，発達・情緒障害通級指導教室などで利用されるために，今後何をどのような順で明らかにし，人材育成を行えば良いのか，また，そのような普及・社会実装のためにどれくらいの期間があれば達成できるのか，この点は，博士論文の内容を超えるものの，本研究の発展のためにぜひ解明を続けてほしい。

以上をふまえ，本審査委員会では，本論文を以下のように評価した。

本論文では，①丁寧に事例にあたり，日常生活場面に取材して文脈分析課題を開発したこと，②実際に，文脈分析課題が定型発達児の場合に，どのような年齢において通過するのかを明らかにしたこと，③定型発達児の中には言語的理由づけができないにも拘わらず課題に通過する事例（直感的心理化）が散見される事実を再確認したこと，④高機能自閉症児では統語的能力が高い場合に，言語的理由づけを用いて中枢性統合の弱さを補償し，課題に通過する事例（命題的心理化）があることを確認したこと，⑤統語的能力が高くはなく，限局反復性行動を示す事例では，文脈分析課題をより詳細に課題分析した修正版の課題を用いることで，まとまりのある言語的記述を得ることができる可能性を示したこと，などを成果として挙げることができ，この点を高く評価できる。また，これらの成果は，今後さらに事例蓄積し，文脈分析課題の適用範囲と限界を明確にすることにより，特別支援教育や発達障害臨床，広く社会性を高める教育実践への応用に関する期待が持てる。

その一方で，本論文では仮説を検証するために，医療機関等において十分な標本数（研究協力者）を得た上での介入研究を行うという課題が残されている。従属変数の指標も引き続き探索しながら，命題的心理化の学習過程について，サブタイプを想定しながら記述していけると良いであろう。

なお，本審査委員会は審査の過程で，本論文の完成度をさらに高めるために限定的な修正（説明の明確化と，字句および表現の修正）を求め，申請者はこの要求にもとづく修正を適切かつ十分に行った。

本審査委員会は本論文を総合的に判断し，その価値，意義および課題について検討した結果，本論文が期待される要求水準を十分に満たしたものであり，博士学位の授与に値すると判断する。